

日本全国 あちこち探索（東国三社）（鹿島神宮）



[鹿島神宮](#)

平安時代に神宮という社号を名乗っていた神社は伊勢神宮、香取神宮、鹿島神宮の3社とされていて、それぞれの祭神は天照皇大神（あまてらすおおみのかみ）、経津主神（ふつぬしのかみ）、武甕槌神（たけみかづちのかみ）。いずれも日本神話に登場するそうそうたる顔ぶれの神々です。

しかしながら、奈良時代に編さんされた日本書紀では、伊勢神宮・石上神宮（いそのかみじんぐう）・出雲大神宮（出雲大社）が神宮と記載されていたようです。鹿島神宮は藤原氏の氏神、石上神宮は物部氏が祭祀していたことを考えると、ここにも奈良・平安時代の権力者たちの陰が見え隠れしています。

ところで今回の探索テーマは鹿島神宮と香取神宮、いずれも関東の東の端（はし）で、ここがどのような場所であったのか、興味が尽きません。



[「東の一の鳥居」](#)

自宅を出発したのは8月19日の朝7時半、京葉道路から東関東自動車道路を北東に向けて走ります。途中休憩したのは[酒々井パーキングエリア](#)、これで「しすい」と読む難読地名の一つです。

ここは成田空港の最寄であるため、インフォメーションボードには、高速道路の渋滞情報だけでなく国内・国際線航空機の発着状況まで詳しく掲載されています。

小休止してから走ること40分、最初に訪れたのは鹿島神宮「東の一の鳥居」です。この鳥居は鹿島灘の浜にあって、多くのサーファーで賑わっています。



[「西の一の鳥居」](#)

この鳥居は鹿島神宮を象徴する鳥居、天照皇大神（あまてらすおおみのかみ）が太陽を象徴する神であるとすれば、ここは太陽の出（いず）る地であり、太陽信仰の基本となる神の地に違いありません。もしもこの更なる東方に小さな島があったなら、間違いなく沖縄の久高島のような神の島として、崇（あが）められていたことだろうと思います。

そして鹿島神宮といえばレイライン。鹿島神宮から富士山を結んだ線の延長上に伊勢神宮があり、その先には宮崎の高千穂神社が一直線上に並んでいるというお話です。

高千穂神社と云えば、天照大神の孫で、下界を統治するためにこの地に天降（あまくだ）ったとされる邇邇藝命（ににぎのみこと）を祀った神社。奥さんは木花之開耶姫（このはなさくやひめ）で富士山をご神体とする浅間神社の祭神。そして伊勢神宮は天照大神を祀った神社であって、ストーリーの背景もしっかりと仕上がってます。

日本全国 あちこち探索（東国三社）（レイライン）



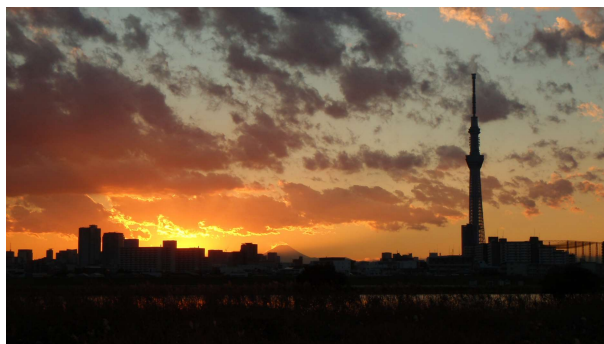
鹿島神宮～高千穂神社レイライン(キヨリ測で作成)

前編で話題にした鹿島神宮と高千穂神社を結ぶレイライン。このラインは、他にも幾つか興味深いポイントを通ります。その一つがスカイツリー、神々が天から降臨してくる時の依り代（よりしろ）になっていて、邪悪から東京を護っているという話にまで発展しています。そこまで云われるとこのスカイツリーも、高千穂の峰に突き刺さる天逆鉾（あまのさかほこ）に見えてしまうから不思議です。

如何にも関係ありそうな史跡が一本のラインに並ぶというのは面白そうで、大きな日本地図を探しに近くの本屋に行ってみました。買い求めたのは畳一畳弱の大きさの日本地図(税別 905 円)です。早速、フローリングの床に地図を広げて三角定規を当ててみます。

パソコンで簡単に調べたいときは、[「キヨリ測」](#)が便利です。最初に探すのは自宅を中心にしたレイライン。暇に任せて自分の生まれ故郷やゆかりのある場所との間にどんな町や山あるかを調べてみると、結構色々なものがヒットします。東京近郊に住む人ならば、スカイツリーや富士山との間に何があるかを探すのも一興（いっきょう）です。

レイラインに並ぶ対象物は、偶然的なものがほとんどですが、意識して位置を決めた史跡もあるようです。これには、風水や陰陽道（おんみょうどう）思想が関わっているのだらうと思います。



[スカイツリーと富士山](#)



[息栖\(いきす\)神社](#)

話を鹿島神宮～高千穂神社レイラインに戻し、この方角が、日の出の方向とどのように関係するかも興味深い事柄です。国土地理院で開設している[測量計算サイト](#)で方位角を計算してみれば、北を0度とした角度は64.55度となりました。

これを[日の出の方角が計算できるサイト](#)で調べてみれば、東京では2018年5月20日と7月25日前後の日の出がこの方角と一致します。ちなみに、今年の夏至は年6月21日で前後に1ヶ月程ずれますが、これくらいの誤差は大きな口マンに免じて許してあげてもよいのではないかと思います。

東国三社探索の旅、次に向かうのは息栖（いきす）神社です。場所は鹿島神宮から南へ9.2km、鹿島神宮と香取神社を結ぶ二等辺直角三角形の直角部分にあたります。

現地に到着してみれば、予想していたより静かな場所で土産店などありません。この神社の[一の鳥居](#)はすぐ近くの利根川岸に立っています。この鳥居は鹿島神社の南の一の鳥居を兼ねているということで、ここも鹿島神社の境内の一部という扱いのようでした。

参道の両脇には奉納された[灯籠\(とうろう\)](#)が整然と並んでいます。参道に並ぶ灯籠では、火口（ひぐち）が参道を歩く参拝者の足元を照らす方向を向いていると思っていたら、ここのはすべて本殿方向を向いています。理由は分かりませんが、いちいち気するのも止めました。

日本全国 あちこち探索（東国三社） 香取神宮と佐原



[香取神宮](#)

鹿島神宮と息栖（いきす）神社をお参りした後は、利根川を渡って香取神宮に向かいます。利根川は千葉と茨城の県境になっていて、鹿島神宮と息栖神社が茨城県、香取神社は千葉県に属します。

香取神宮の鳥居の前で一礼し参道を進みます。鹿島神宮の厳（おごそ）かな雰囲気とはやや様子が異なっていて、両脇には奉納された真新しい灯籠（とうろう）が所狭しと並んでいます。拝殿にしても黒に金を配したシックな作りとなっていて、どこことなく垢抜けしている感じです。

少し離れたところには、地震を起こすナマズの尻尾を抑えているという[要石（かなめいし）](#)がありました。そう云えば[鹿島神宮にも要石](#)があって、そちらは頭を押さえているらしいです。

香取神社の祭神は経津主神（ふつぬしのかみ）、その分社の位置を調べてみると、利根川と江戸川沿いに分布している模様です。利根川と江戸川は千葉県西北端の関宿でつながっていて、常陸の国から江戸に物資を運ぶ主要な水路となっていました。平安時代がどうだったかはまでは考えが及びませんが、少なくとも江戸時代にはその水運を一手に仕切っていたのが香取神社を祀（まつ）る一派だったように思えます。[\[参考文献:関東平野 鹿島神社、香取神社分布の特徴\]](#)

探索旅の締めは、佐原（さわら）の街を覗いてみようと思います。佐原は江戸時代に舟運で栄えた町で江戸情緒あふれる古い町並みが残されています。迷わず最初に向かうのは伊能忠敬の旧宅と伊能忠敬記念館。あの精巧な日本全国地図の出来栄はもちろんながら、隠居して高橋至時に弟子入りしたのが50歳、いまの定年退職者も負けられません。



[佐原伝統的建造物群保存地区](#)



[伊能忠敬 測量地図](#)

この景観を再生するには大変な苦勞があったようで、保存活動が本格化したのは竹下登首相政権下での「ふるさと創生事業」（1988年/昭和63年）がきっかけらしいです。

この時は、全国の市町村に1億円をばらまくという大胆な施策でした。この思想が受け継がれたのかどうかは分かりませんが、最近の話題はふるさと納税。

[自治税務局市町村税課の報告書](#)によれば、2017年の寄付受入総額は3,653億円。受入額の多い都道府県は、北海道37億、佐賀31億、宮崎25億、山形県23億となっています。

一方、東京は2.3億、京都1.3億、愛知5.4億となっていて、大都市から地方への資金の流れの目論見（もくろみ）は成功しているように思えます。違和感があるのは大阪の20億円で、その主因は「返礼割合3割程度」という総務省の指導を完全に無視し続けている泉佐野市にあるようです。

流石（さすが）に一つの自治体で13.5億円は集め過ぎ、これには総務省も対抗姿勢を露（あら）わにし、「ふるさと納税の対象から外す。」などと圧力をかけているようです。（2018年9月5日 NHK NEWSより）